昔、男ありけり。その男いとなまめかしき妻と暮らしてけり。ある時、例のごとく仕事に出で、遅ればせに帰りにければ、妻重き病に伏せにけり。男、看病しけるが、甲斐なくて、妻失せにけり。男、深く心を閉ざしにけり。春が来、夜に一人月を眺め、詠める。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年女子）

昔、男ありけり。その男、思ひたる女ありけり。男、「今宵逢はむ。」と契りたりけるに、女は、この男をこそ得めと思ふ。しかれども、わけありて別れにけり。

年ごろ経るほどに、男、女と会へども、女、他に通ふ男ありけり。男、いたく悔しがりて、「今宵まで思ひ合ひたると思ひたるものを。」その男、月を見て、かくなむ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年女子）

昔、男ありけり。あてなる女の家居近きわたりなりけり。さてもいと美しかりつる女かな。何人ならむ。めづらかなる女の容貌なり。なほめでたく思はるること、せき止めがたし。

またの年、かの男、昔の契りありけるによりなむ、この地に来たりける。されど、かの家のあらねばいかがは悲しき。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
いみじく泣くもすずろに悲し。

（２年男子）

昔、男ありけり。その男、妻ありけるも、あまたの女と遊びけり。ある夜、妻、家に帰らざりけり。二人、若き頃に桜の木のもとで共に望月を見けり。妻、その木を訪れ、半月を見つつ歌を詠みけり。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年男子）

昔、男ありけり。身いと貧しき百姓にてありけり。春の月のいと美しき夜、眺めんとて外に出でにけり。川のほとりに一人の女ありけるを見けり。川面の月のかげ、その女をいとなまめかしく映し、春の心地よき風、女の髪を吹きけり。男、一目見るやこの女をよばひけり。男、女と二人の息子を養ひけり。

ある日、役人、この男を防人に行かせけり。男、ありし日を偲び、読みける。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年男子）

昔、男ありけり。その男、財あまた持ち、豊かなる暮らしをしけり。その近き所に女ありけり。その女、すなほにして、をかしく暮らしけり。男、幼き頃よりその女を恋ひつつ、本意のごとくあひにけり。

居ること数月、女、財の使いざま荒くなりけり。今めかしき調度を欲し、価値ある食事を欲しけり。つひに女の心さへ変はりけり。男、嘆きつつかくなむ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年女子）

昔、男ありけり。その男の近き所に住める、幼き時からの仲の女ありけり。女、あてやかにしていと美しく、さながら桜のごとし。年ぶるほどに男、女を思ひ初めたり。大人になりにける時、京にて仕ふべきことありて、会ふこと叶はずなりにけり。京へ立つ日の夜、望月の美しきに別れを惜しみけり。

三年の後、男、急ぎ帰りて女を問ふも、女、他の男とともにありけり。男、わびしくなりて、いよいよさめほろと泣きにけり。やがて昔を思ひ出だして詠める。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年男子）

昔、男ありけり。幼き頃より共に過ごし、こころにくき女ありければ、男、この女をこそ得めと思ひけり。ある月の明かき春の夜、二人契り交わしけり。

男、宮仕へしにとて、京に行きけり。三年の後、ふるさとに帰りけるも、女他の男とこそあひぬれ。男、かこちてかくなむ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

男の悲しみぞえならぬ。さらに女を忘るることなし。

（２年女子）

昔、男ありけり。男、上のお召しありて、宴にわたる。宴終わりて帰りける時に、いとなまめきたる女の、庭に出でたるを垣間見てけり。月いと明かくてをかしき夜なりけり。男、好き心ありて、声を掛けたれば、振り向く。髪、月の影に輝きてうつくし。男、心地乱れにけり。男、「君が故に恋に落ちにけり。いかに。」とて、言ひけるが、女、「いかに思ふ人あらざらむ。」とて、家に入らむと急ぎにけり。男、やがて帰りにけり。

一年過ぎて、男、友にかの女のこと尋ぬるに、かの友言ふに、女、やんごとなき人なり。いふかひなきながら、さるも、心にくくありて、いとわびし。男、おほけなきも、情けあり。あへなくして、歌をやる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年男子）

昔、男ありけり。ある春の夜、友を率ゐて花見に行きけり。なまめかしき女と会ひて、恋に落ちけり。月の明かく、をかしき夜、つひにあふ。

またの年の春、妻を疫病にて亡くす。一人妻を偲びてなむ読みける。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年女子）

昔、男ありけり。その隣にいとなまめいたる女ありけり。男、垣間見てけり。わが心の内を伝えむと文を書きてやる。返しあり。女、やんごとなき公達の女なり。男、いやしき家なり。故にあふこと叶はず。

幾たびか文交わすも、ある日、返し来ず。待てども来ず。女、内参りし、中宮と聞こえさす。男、それを知り、いたく悲しぶ。

ある春の夜、男、月を眺む。月影の射して、花いとあはれなり。されど、男、あはれと思ふこともなく、せきあへぬまま、最後の文とてかくなむ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

（２年女子）